

小児期からの喘息治療と長期の皮膚症状を経て四肢の皮膚が整った成人アトピーの経過 (54 歳 成人)

症例 ID：001-50-TM7 | 記録日：2017 年 1 月 13 日

1. 診断・治療前経過

3 歳頃に喘息を発症し、小学 2 年頃から減感作療法と毎日の内服治療を長期間受けました。大学期に通院を中止した約 1 年後、アトピー症状が出ました。

社会人になって約 5 年後にアトピーが再発し、外用治療や減感作療法を受けました。症状は次第に重くなり、眼瞼腫脹と頻回の喘息発作のため、通勤途中に点滴を受ける状態となりました。

2. ステロイド使用歴

項目	内容
使用内容	アトピーに対して複数のステロイド外用薬を使用しました。喘息に対する注射・内服治療も長期間受けました。
製品名	不明です。
強度	不明です。
使用期間	大学期から松本医院受診前まで断続的に使用しました。
中止時期	松本医院での治療開始時期です。
来院前／後	来院前に使用歴があります。来院後は使用していません。

3. 治療開始後の経過（リバウンドを含む）

時期	治療開始から	経過
3 歳頃	喘息発症	夜間の喘息発作がありました。
小学 2 年頃～大学期	長期治療	減感作療法と毎日の内服治療を続けました。
大学期	アトピー発症	通院中止から約 1 年後に皮膚症状が出ました。
社会人 5 年頃	再燃	アトピーと喘息が悪化し、眼瞼腫脹と頻回の点滴治療が必要となりました。
2002 年頃～	治療継続	煎じ薬、漢方入浴、外用処置を続けました。皮膚剥離、手指亀裂、頸部浸出液がみられました。
2008 年頃～	皮膚変化	大腿部から滑らかな皮膚へ変化し始めました。
2010 年 12 月	検査値ピーク	総 IgE が経過中の最大値となりました。
記録時点	経過中	太く腫れていた指は通常に近い太さへ戻りました。

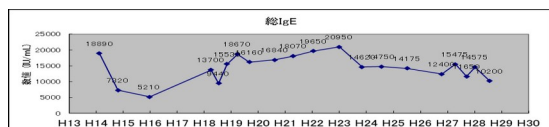
4. ピーク時期

ピークは、眼瞼が腫れて半分閉じた状態となり、喘息のため通勤途中にほぼ毎日点滴を受けていた時期と、治療中に手指全体の亀裂と頸部浸出液が強かった時期です。

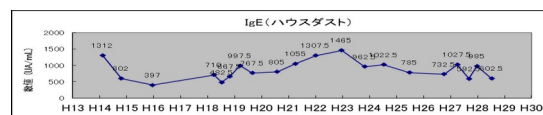
5. 困りごと

- 手指の関節が裂け、全ての指へ絆創膏を巻く必要がありました。
- 頸部の痛みで後方確認時に首を動かせず、体ごと向きを変えていました。
- 記録直前は喘息発作がほぼ毎日あり、吸入薬を手放せない状態でした。

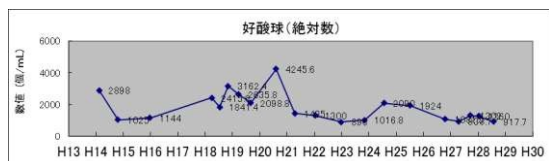
6. 検査値・写真・画像 ※治療前後の比較ではなく、経過中にみられた症状や検査値の記録として掲載しています。



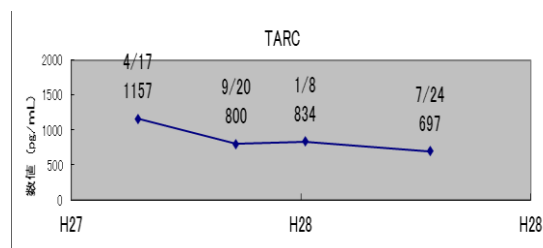
総 IgE の推移。



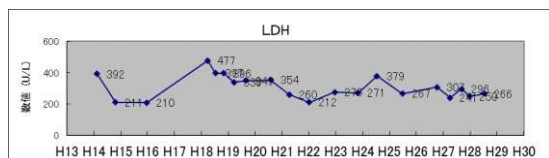
IgE (ハウスダスト) の推移。



好酸球数の推移。



TARC の推移。



LDH の推移。

7. 経過のまとめ

長期経過の中で全身のざらつきは大腿部から徐々に軽減し、太く腫れていた指も通常に近い状態へ戻りました。

本ページは、患者さんの経過を時系列で整理したものです。
症状や経過には個人差があり、同様の経過や結果を保証するものではありません。